

「常葉ブランドの英語教育構築に向けて：初年次全学共通教養科目 『英語コミュニケーション』テキスト研究」についての報告

谷口茂謙, ピーター・ハーディケン, 小池理恵, 山田昌史

Towards the Creation of Tokoha Brand Education:
A Report on the Research and Development of a Textbook
for Required First-year English Communication Classes

Shigenori TANIGUCHI, Peter HOURDEQUIN,
Rie KOIKE, Masashi YAMADA

2019年11月7日受理

Abstract

Key words: Authentic teaching materials, English communication, Genre-based approach, Task-based learning, Websites

This is a report on a collaborative project in which researchers designed a textbook for first year students of English Communication at Tokoha University. The university has been working on educational quality assurance for several years. The university puts emphasis on task-based learning in small groups in the classes of English Communication. Taking this into consideration, the researchers tried to design effective tasks using authentic teaching materials that could be closely related to students' daily lives. As a result of the project, a textbook entitled *Tokoha University English Communication I & II* was published in 2019. This report explains the background of the research project and our genre-based approach to producing the textbook. After this, we explain the progression of our research over three years. Each unit of the textbook is then reviewed by its respective author. In addition, we discuss the remaining problems and possible solutions in detail.

キーワード：オーセンティックな教材、英語コミュニケーション、ジャンル・アプローチ、課題探求型学習、ウェブサイト

1. はじめに

谷口 茂謙

常葉大学では、教育の質保証を目指して、2013年度よりカリキュラム改善プロジェクトが始まった。全教職員を対象に、専門家を招いてFDSD研修会が行われる一方で、プロジェクトチームが結成され、その下部組織として、教養教育（全学共通科目）検討ワーキンググループが設置された。さらに、その下に、スキル系科目について検討する部会として、言語文化／外国語科目、情報処理／ICT科目、第二外国語科目、体育／スポーツ科目の4つの検討部会が設けられた。その一つである言語文化／外国語科目検討部会で、全学共通科目の英語コミュニケーションの改善が検討されることとなった。

教養教育検討ワーキンググループにおいて、英語コミュニケーションは、1年次にⅠとⅡ、2年次にⅢとⅣを全学部で必修科目とする方針が定められた。そこで、言語文化／外国語科目検討部会では、CEFRやTOEICなどに示された標準的なCan-Do Statementsを参考に、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳで求めるCan-Do Statementsを検討することから始め、教育の目的と目標、それらを実現するための方法について検討を重ねた。その結果、英語コミュニケーションⅠ・Ⅱの「授業の概要」、「授業の目的」および「授業の到達目標」が、次のように決まった。

授業の概要

教養英語では、受講生の大学および社会での学びや生活に役立つ英語学習活動を行う。一年次に開講される「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」においては、私たちにとって身近な、生活に即したトピックを中心に学習を行う。本科目では、小グループによる協同学習の形態で、タスク中心の課題探究型・課題解決型の学習を進め、教室の中と外の世界とのつながりを考えながら英語を学ぶ。こうした学習を通じて身に付けた思考スキルや学びの姿勢が英語の授業の枠にとどまらず、他の教養科目、専門科目での学びに活かされることを目指す。

授業の目的

教養英語科目の目的は、実社会と関わりのある多種多様なオーセンティック（真正）な教材やメディアの活用を通じて、21世紀を生きるのに必要なコミュニケーション能力、異文化理解能力、思考力の向上を図ることである。具体的には、①英語でコミュニケーションを図るスキル、②文化的背景が異なる人と相互理解を図る能力、③批判的思考力、論理的思考力などの高次の知的技能、④より積極的な姿勢で自律的に英語を学ぼうとする態度の伸長を図る。この目的の達成を目指し、英語コミュニケーションⅠ、Ⅱでは、以下の到達目標を設ける。

授業の到達目標

- ・日本を含む様々な国・地域の生活、文化に関する平易かつ簡潔な英語（説明文

や事実記事）を読んだり聞いたりして、要点や基本的な情報を示すことができる。（目的①、②）

- ・日本を含む様々な国・地域の生活、文化に関する平易かつ簡潔な英語を読んだり聞いたりしたことについて、口頭や文書（SNS や電子掲示板等を含む）で自分の意見や考えを簡潔な文構造の文 2、3 行程度で交換できる（目的①、②、③、④）
- ・日本を含む様々な国・地域の生活、文化に関する平易かつ簡潔な英語を読んだり聞いたりしたことをもとにして、インタビューやアンケート調査、文献調査を行い、その結果の要点を小グループ内で、英語で伝えられる。（目的①、②、③、④）
- ・誤解や聞き間違いにつながるような日本語からの音韻上の干渉を引き起こす主要な要素に注意しながら口頭でのやりとりをすることができる。（目的①）
- ・一般的な文化的信念や価値観に対する認識をもつことができる。（目的②）
- ・馴染みのある話題に関する文化的信念や価値観について日本と外国とを比較することができる。（目的②）
- ・自分の英語学習経験を振り返り、そのレベルや関心に沿って学内外で利用できる英語学習資源に授業時間外にアクセスし、そこで学んだ内容についてクラス内で意見交換をすることができる。（目的①、④）

（英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ 常葉大学電子シラバス）

これらを実現させれば、将来的には、常葉大学独自の英語教育を構築することができる。そのためには、全学部で必修科目とされることを念頭に、学部を問わずすべての学生の事情に対応できるように配慮しなければならない。これはかなり難しい課題だが、その実現に向けた第一歩として、有志の専任教員たちが、英語コミュニケーションⅠ・Ⅱで使用する独自のテキストを制作しようと試みた。2016 年度から 2018 年度までの 3 年にわたって行われた共同研究である。結果として、2019 年 3 月に株式会社金星堂より、『常葉大学英語コミュニケーションⅠ&Ⅱ』を出版することができた。

この報告では、3 年間の研究の経過を報告するとともに、テキストの制作過程を各執筆者が振り返り、それぞれの制作意図、工夫した点、今後の改善に向けた提言を述べる。併せて、常葉ブランドの英語教育の構築に向けた今後の課題について考察する。

2. 研究の動機と制作の基本方針

前節で紹介した授業の概要、目的、到達目標を実現するためには、市販のテキストでは不可能であることは明白であった。それなら、自分たちで作るしか方法はない。自分たち独自のテキストができれば、近い将来に常葉ブランドの英語教育を構築することも夢ではない。これが、研究に参加した教員たちの動機である。

研究を始めるにあたり、執筆者たちは、授業の概要、目的、到達目標から、制作の基本方針として特に留意することを検討した。概要からは、学生たちの「身近な、生

活に即したトピック」を扱うこと、「小グループによる協同学習の形態で、タスク中心」の学習をさせることの2つである。目的からは、「実社会と関わりのある多種多様なオーセンティック（真正）な教材」を取り入れることを申し合わせた。また、「文化的背景が異なる人と相互理解を図る」訓練と、「自律的に英語を学ぼうとする態度」を身につけさせることを重視した。到達目標からは、「日本を含む様々な国・地域の生活、文化に関する平易かつ簡潔な英語を読んだり聞いたりして、要点や基本的な情報を示すことができる」、そのような事柄について「口頭や文書で自分の意見や考えを簡潔な文構造の文2、3行程度で交換できる」、そのような事柄について「インタビューやアンケート調査、文献調査を行い、その結果の要点を小グループ内で、英語で伝えられる」、「学内外で利用できる英語学習資源に授業時間外にアクセスし、そこで学んだ内容についてクラス内で意見交換をすることができる」の4点に留意した。

身近なトピックに関するオーセンティックな教材を用いてグループ学習を進め、その中で、読む、書く、聴く、話すの4技能を総合的に訓練する。このような基本方針で執筆者の合意を得ることができた。これをテキスト全体で貫くために、執筆者がそれぞれに担当するレッスンで、ジャンル・アプローチと呼ばれる指導法を取り入れることとした。各レッスンで、Eメール、求人広告、観光案内など、様々なジャンルの1つを取り上げ、モデルとなる英文を学生たちに読ませる。それぞれの語彙、文法、表現などの特徴を考えさせる。理解したことを踏まえて、作文や対話の練習をさせる。執筆者がジャンル・アプローチを意識しながら制作を進めることによって、テキスト全体を通して、基本方針が一貫した指導が可能になると考えられた。

3. 研究の経過

3.1. 2016年度

2016年度は、初めに、上に述べた基本方針について話し合い、それに基づいて、各執筆者が担当するトピックを決めた。その際に、学生にとって身近な内容とするために、すべてのレッスンで、原則として地元静岡に関する情報を盛り込むことを申し合わせた。そして、各執筆者が独自に制作したレッスンを持ち寄って研究会を開き、内容を検討して改善を重ねることとした。

トピックの候補として、次のものが挙げられた。前期のⅠでは、Tokoha University、Club Activities、Part-time Jobs、Hometown、Resorts、Cuisine、Literatureの7つである。後期のⅡは、Education、Politics、Industry、Environment、Welfare、Local Events、Futureの7つが候補となった。ⅠとⅡのそれぞれで、7つを候補とした理由は、1つのトピックを2回の授業で扱うためである。14回の授業と学習のまとめの回で15回の授業を想定した。これらの候補から、各執筆者が希望するトピックを選ぶことにした。2016年度の段階では、共同研究のメンバーとして、執筆者が6名いたので、まずは、Club Activities、Part-time Jobs、Hometown、Resorts、Cuisine、Literatureの6つのトピックから制作にとりかかった。

実際の授業では、「小グループによる協同学習の形態で、タスク中心の課題探究型・

課題解決型の学習を進めるために、すべてのレッスンに次のようなタスクを盛り込むこととした。

1 回目

- Pre-unit research
- Words you know
- Sound Awareness
- Know the genre
- Communication analysis
- Homework

2 回目

- Homework review
- Prosody awareness
- Focus on form
- Remix
- Reflection

執筆者全員で、事前と事後の学習の重要性を確認した。事前に知っていることをはっきりさせ、授業で知りたいことを学習させ、知ったことを確認させる。つまり、振り返りを感想だけにさせないように工夫することを申し合わせた。Pre-unit researchで予習として調べ学習の課題を与え、Know the genreで学ぶ英語の特徴を知り、それをCommunication analysisで仲間たちと分析しつつ理解を深める。2回目の授業までにHomeworkで時間外学習をさせ、2回目では主に、学んだことを活用して自分の考えを伝える準備をさせ、Remixで作文や対話を実践させる。このような流れを執筆者全員が念頭に置いて制作を進めた。

こうして、2016年度末には、Club Activities、Part-time Jobs、Hometown、Resorts、Cuisine、Literatureのトピックについて、テキストの原型としての教材をまとめることができた。この原型を、執筆者の教員2名と協力を承諾した教員1名の3名が、2017年度に実際の授業で使うことになった。毎回の授業で印刷物として学生に配布して使用し、その反省を研究会で共有し、必要な改善を加えることとしたのである。

3.2. 2017 年度

2017年度は、諸事情により残念ながら、執筆者のうち2名が共同研究のメンバーから外れることとなり、残った4名で制作を進めた。3名の教員が実際に原型の教材を使って授業を行い、様々な問題が研究会で執筆者に報告され、改善が検討された。中でも、テキスト全体の構成に関わる大きな問題が1つ明らかになった。

それは、執筆者たちが予め考えた進度では、授業を進めることができなかったことである。当初の目論見では、2回の授業で1つのユニットを終える予定であったが、実際には、3回から4回の授業を費やした。これは、必ずしも、テキストの内容が学生の実力に合わない難しいものであったということではない。例えば、進度の調整がうまくゆかずに、Know the genreの英文の読解が宿題になることがあった。しかし、学生の予習が不十分であったために、翌週の授業時間中に改めて取り組ませたりした。そのために進度が大幅に遅れたこともあった。その一方で、遅れのより大きな原因は、むしろ、学生が課題に熱心に取り組んでくれたために「ここで切り上げてはもったい

ない」という教員の判断が働き、じっくり時間を取ったことにある。予習の意欲を起こさせることまではできなかった読解の課題でも、授業中に実際に読んでみると興味をそそられたようで、グループで手分けをして熱心に読む学生たちが多かった。

Remix では、その傾向がよりはっきり表れた。提出された課題を見ると、文法的な正しさや内容の深さまで問うと物足りないものも少なくなかったが、多くの学生が、学習内容を活用してかなりの量を書いていた。到達目標にある「自分の意見や考えを簡潔な文構造の文2、3行程度で交換できる」ことは十分に満たしている成果が多かった。制作の段階では、この課題を与えても、しっかり書いてくれる学生がどれだけいるか、正直なところ、心もとない思いであったが、授業中にグループで相談させたり、携帯電話で調べさせたりしたことで、多くの学生が積極的に書いてくれた。宿題とした時でも、他の学生の作品を丸写しにしたようなものは見当たらなかった。

進度が遅れるという問題が出た一方で、個々の課題に対する学生の学習意欲を維持させることも重要な課題となった。この点の改善策として、授業で扱うトピックの数を減らし、個々の課題にかかる時間を増やすことを、執筆者全員で確認した。その方が、到達目標を達成できる見込みが大きいと判断したからである。そこで、扱うトピックを執筆者で再検討した。その結果、前期のⅠで Club & Circles、Part-time Jobs、Hometown、Resorts、後期のⅡで Literature、Industries、Education、Your Future の4つずつを扱うこととして、それぞれの制作と改善に取り組んだ。

また、すべてのレッスンにおいて、タスクの名称と内容を次のように統一した。

- Pre-unit Research：授業前に予習として関連する知識を調べる
- Vocabulary Development：クロスワードを解きつつ学習に必要な単語を知る
- Sound Awareness：単語レベルでの基本的な発音を練習する
- Know the Genre：パラグラフの内容を読んで理解する
- Communication Analysis：与えられた英文の特徴をグループで話し合う
- Reading and Communication Analysis Homework：学習した内容を復習するとともに、次の学習に向けた予習となる課題に取り組む
- Homework Review：予習した課題についてグループで話し合う
- Prosody Awareness：文として単語がつながると発音が変化することを理解して、文単位での基本的な発音を練習する
- Grammar Awareness：高校までに学習した基本的な文法を振り返る
- Remix/Rewrite：学習した内容を活用して作文や対話の練習をする
- Reflection Feedback：Remix/Rewrite の成果を学生同士で評価しあう

これによって、テキスト全体の構成が固まり、授業の流れを一貫したものにできた。

他に検討すべき課題として、期末試験とその採点基準の問題が明らかになった。期末試験では、複数の教員で共通の問題を使用することを試みた。試験の各問題は、シラバスの到達目標のうち、授業で出す課題で評価するものを除いた目標を評価でき

るように出題した。統一した試験問題の具体案を示すことはできたが、その一方で、採点基準については、教員の間でおおまかな申し合わせをすることにとどまった。執筆者全員が授業を担当しているわけではないこともあり、研究会でも十分な検討ができなかった。共通した試験問題を導入するには、統一された明確な採点基準の作成が不可欠だが、具体案を示すことができなかった。執筆者たちは、統一した試験問題の導入そのものの先行きが不透明であるため、まずは、テキストの完成を優先させることとして、制作と改善を急いだ。

2017年度末には、上記の8つのトピックを扱うテキストの試作品を完成させることができた。併せて、筆者が授業の準備をする際に書き留めた情報や、作成した模範解答をまとめた「教授用資料」もまとめた。そこで、与えられた研究費を活用して、これまでの成果を簡易製本の形で冊子にした。これを2018年度の授業で実際に使用してさらなる改善を加え、出版につなげることを目指した。

3.3. 2018年度

2018年度は、冊子にまとめた試作品を、引き続き3名の教員が授業で使用した。残念ながら、使用に協力してくれる教員を増やすことができなかった。冊子の完成が年度末にずれ込んでしまい、教員が次年度のためのシラバスを作成するまでに間に合わせることはできなかったからである。その現実を受け入れる以外に方法はなかった。執筆者の間では、出版社との交渉をはじめ、出版に至るまでに現実的な様々な問題が出るのが予想された。そこで、それらの問題に取り組みつつ、できる限りの改善を加え、出版に漕ぎつけることを申し合わせた。

出版社については、株式会社金星堂に依頼することにした。かねてより今回のテキストの出版に関心を寄せて下さっていたことと、執筆者たちが制作に使用しているソフトウェアによる原稿をそのまま受け入れて下さった利点が大きかった。実際の出版に至るまでに、金星堂には様々な支援をいただいた。

この共同研究のテキストでは、「実社会と関わりのある多種多様なオーセンティック（真正）な教材」を取り入れることにこだわった。そのため、インターネット上の記事を利用した教材が大変に多くなった。これらの利用には、著作権の問題が関わる。幸い、金星堂がそれぞれの記事の著作権について交渉して下さった。多くの記事で許諾を得ることができたが、中には許諾が得られない記事や、著作権を持つ相手に連絡が取れない記事もあった。金星堂との交渉で許諾を得られなかった記事については、筆者が先方と直接に交渉することもあった。結果として、テキストへの記事の掲載を諦め、資料として授業内で配布することを了承してもらうケースや、新たに全く別の記事を探して金星堂から交渉してもらい、許諾を得て差し替えるケースもあった。

また、前年度の簡易製本ではA4判で制作したが、実際の出版ではB4判が主流であると金星堂より助言を受けた。そのため、内容のレイアウトが、授業の進め方の都合に合わない形で変わってしまう箇所が出たりした。それらについては、授業に支障をきたさないように、各執筆者に書き直してもらった。このような問題に対応するに

も、記事使用の許諾を得ることと同様にかかなりの時間を費やした。

紆余曲折はあったものの、金星堂より指定された期限に合わせて原稿を提出し、年度末の出版が可能となった。2019年4月から、6名の教員が英語コミュニケーションⅠおよびⅡのテキストとして採用してくれている。なお、教授用資料については、テキストに付属する冊子としての出版を見送った。テキストを使用する教員の便宜を図るために、教授用資料には、様々な情報を筆者が書き加えている。もちろん、出版するには改めて許諾を得る必要のある情報も多い。そこで、出版はせず、使用する教員の間のみで、授業用の資料として情報を共有するにとどめることとした。

4. 制作の振り返り

4.1. Unit 1 Clubs & Circles

ピーター・ハーディケン

(翻訳：谷口 茂謙)

ユニット1、そして、この教科書全体に一貫した教授法上の考え方は、ジャンル・アプローチである。ジャンル・アプローチを取り入れた一連の活動や課題を通して、学生たちが日常生活に関する情報を伝えられるようになることを支援する。ユニット1のテーマはClubs and Circlesである。本学のクラブやサークル活動をいろいろと見てみることは、本学の1年生が、英語の授業や学習の際に学生同士で取り組む練習の題材として極めて適切と考えられる。それがこのテーマを選んだ理由である。

最初のタスクはPre-unit Researchである。予習として、自分たちが参加できるクラブやサークルを本学のウェブサイトで調べさせる課題である。学生たちに、クラブやサークルの名前を日本語と英語で指定された欄に記入させる。この活動は、クラブやサークルに関する学生たちの予備知識を増やしたり、基本的なイメージをはっきりさせたりすることを意図したものである。

2つ目のタスクはVocabulary Developmentで、学生たちの語彙を増やすことに焦点を当てている。学生たちには、本学にあるクラブやサークルの日本語名の一覧が与えられている。それぞれのクラブやサークルの英語名を、縦横に並べられたアルファベットの中から探すのである。

3つ目のタスクはKnow the Genreである。クラブやサークルを英語で紹介した読解用の例題文を読んで、4つの問いに対する答えを考えたり、内容を分析したりする課題である。この文章がどこから引用されたものか、この文章を作成するためにどのような人々が関わっているか、この中で伝えられている情報にはどんな特徴があるかについて、学生たちに考えさせる。加えて、知らなかった語句を書き出させ、意味を調べさせる。これら4つの問いは、メディアの情報を理解する能力の基礎的な訓練であるとともに、ジャンル・アプローチの一環としての役割を果たす。学生たちは、後の課題で類似の英文を作成することになる。そのため、このジャンルで語句がどのように使われているかを注意して見ておくことは、学生たちにとって重要なのである。

4つ目のタスクはCommunication Analysisである。学生たちに、Know the

Genre で与えられた 3 つのクラブの紹介文を読み返させる。そして、概要の説明、主な活動、活動の日時、活動の場所、問い合わせ先の 5 つの情報を抜き出し解答欄に記入させる。

このユニットの前半の終了時に宿題が課される。学生たちに、もう一度、大学のクラブに関する情報をやり取りする対話を読んで分析させる。この課題では、紹介文ではなく会話を扱う。同じような情報を伝えるにしても、書いて伝える時と話して伝える時では表現に違いがある。それに気づき、その知識を自分たちの書く力や話す力に活かせるようになることが期待される。

ユニットの後半のタスクは Prosody Awareness で始まる。学生たちは、宿題で検討した対話で使われた様々な語句の短縮形を見つけ出す。それぞれの表現の音がどのように変化するかを学ぶのである。

次に Grammar Awareness のタスクが続く。Know the Genre で与えられたクラブ紹介の例題文で、学生たちは、命令法の使い方について考える。命令の意図を含む表現を見つけ出し、どのような語句が、命令の意図を和らげる表現となっているかを学ぶのである。

ユニットの最後のタスクは、授業で学んだことを応用するグループ活動の Remix/Rewrite である。本学のクラブやサークルを紹介するために、このユニットの予習として集めた情報を、各グループで学生たちに共有させる。タスクの指示に従って、Know the Genre で取り組んだ例題文をしっかりと読み返し、クラブやサークルを紹介するために使える表現を集める。それらを Remix して、自分たちのクラブやサークルを紹介するパラグラフを作成するのである。

4.2. Unit 2 Part-time Jobs

谷口 茂謙

このユニットの執筆者は、テキストの原型をまとめた 2016 年度をもって、事情により研究のメンバーから外れた。それまでに作成された原型をできる限り活かして、1 つのユニットとしてテキストに加えた。このユニットでは、大学での勉学と両立できるアルバイトについて考えさせるとともに、英語で書かれた求人広告の特徴を知ることと、自分の仕事について英語で簡単に説明できるようになることを目的としている。そして、次の 3 点が具体的な到達目標となっている。

- ・アメリカの大学生向けにアルバイトの仕事内容を紹介した英文を読み、日米の共通点と相違点を考えながら、自分にとってふさわしいアルバイトの具体例を述べるができる。
- ・英語で書かれた求人広告を読んで、必ず含めるべき情報とそれを伝える英語表現の特徴を述べるができる。
- ・学習した内容を活用して、自分がしているアルバイト、あるいは、これからしようとするアルバイトについて英語で説明することができる。

Pre-unit Research では、大学の学生向け掲示板に出ているアルバイトの求人広告を見て、興味を持った仕事を英語でどのように表現するかを調べさせている。勉学と両立できるアルバイトは大学で紹介されていることや、日本の求人広告には和製英語が多いことにも気づかせたいという狙いがある。自分がよく見聞きするカタカナ表現が、英語では通用しない恐れを自覚し、辞書で調べる姿勢を身につけさせることに意義がある。Know the Genre では、アメリカの学生向けに書かれた仕事の内容を紹介する英文を読ませている。書き手と読み手がどのような人々かを考えさせるとともに、大学で紹介されている仕事と比較することで、日米の共通点と相違点が理解できるように工夫されている。Communication Analysis では、英文の特徴を考えさせるとともに、どの仕事に魅力を感じたか、また、どの仕事なら応募できるかについて話し合わせている。日本語で話し合う学生も少なくないが、英語で自分の考えを述べようと努力する学生も見られ、他の学生に良い手本となることもあった。Reading and Communication Analysis Homework では、外国人向けに英語で書かれた地元のコンビニエンスストアの求人広告を読ませている。求人広告に不可欠な情報は何かと、それを伝える英語表現の特徴を考えさせる課題である。Grammar Awareness で、直接話法と間接話法の復習をさせているが、これは最後の課題に向けての重要な準備となっている。Remix/Rewrite の課題として、ペアでのインタビューをさせている。自分のアルバイトについて述べるのみならず、相手のアルバイトについて聞き取り、それを紹介する英文を作らせるのである。聞き取った内容を相手に説明して返すことで、お互いの理解をチェックさせ、自分たちの成果について相互評価をさせている。

Remix/Rewrite の課題として与えたインタビューの質問には、アルバイトの内容を説明するために必要な情報を問うものだけでなく、その仕事を選んだ理由やその仕事から学んでいることを問うものが含まれている。この工夫は今後も継続したい。提出された作文を見ることによって、学生たちが、自分にふさわしいアルバイトの具体例を考え、説明に必要な情報を英語で含めながら、仕事の内容を説明していることがわかる。予め立てられた3つの到達目標を達成できたことが確認できる。今後に向けて改善すべき点としては、Know the Genre の英文の活用方法が挙げられる。実際のサイトにアクセスすると、38の仕事が紹介されているが、学生の負担を考慮して、“Work-Study Jobs”というグループに分けられた7つの仕事の説明文に絞り、グループで手分けをして内容を考えるように指示した。結果として、日米の相違点が目立ってしまった。日本の大学でも紹介される仕事も紹介されているので、各クラスで1人1つの紹介文を担当して考えさせ、グループ内で報告させるなどの改善を加えたい。

4.3. Unit 3 Hometown

このユニットでは、学生たちが外国人の友人を自分の故郷の街に招くことを想定し、日常で自分たちが使っていないものも含めて、静岡を訪れるために利用できる交通機関を知ることと、乗り継ぎと所要時間の説明が英語でできるようになることを目的と

した。そして、次の３点を具体的な到達目標とした。

- ・成田空港や東京駅など主要な空港や駅から、静岡や浜松など地元の主な駅まで、どのような経路でどの程度の時間がかかるのかについて、およその判断をすることができる。
- ・出発地から目的地までの交通機関を説明した英文を読んで、必ず含めるべき情報とそれを伝える英語表現の特徴を述べることができる。
- ・学習した内容を活用して、富士山静岡空港から自宅までの交通機関と所要時間を英語で説明することができる。

Pre-unit Research では、主要な空港や駅から静岡の主な場所まで、それぞれの所要時間、距離、料金を調べさせた。参考となるウェブサイトと課題を挙げて、英語で書かれた情報から、自分にとって必要な情報を見つけ出す練習をさせた。膨大な量の英語を見て学習意欲をなくしてしまわないように、あくまでも必要な情報を拾い出すことを強調した。すべての内容を理解するのではなく、自分に必要な情報を見つけるスキルが、他の教科においても活用できるはずである。Know the Genre では、外国人向けに英語でかかれた観光案内のウェブサイトの英文を読ませた。交通機関の説明をするために、書き手が読み手に対してどのようなことに配慮しているのか、それを学生たちに理解させる必要がある。そこで、この文の書き手と対象とされる読み手がどのような人たちであるかについて考えることを、Communication Analysis の課題とした。Grammar Awareness では、Know the Genre の中から仮主語の It の構文を見つけ出させた。自宅までの交通機関を案内する表現を練習させるためである。そして、Remix/Rewrite で、富士山静岡空港から自宅までの交通案内を作文させた。その際に、このユニットで学習した内容を使って表現するよう指導した。自分が使える表現を増やさせるためである。最後にペアで説明し合った上で、相互評価をさせた。

Remix/Rewrite の作文を提出させたが、それを見る限り、上記の内容で進めた結果として、予め立てた３つの到達目標を概ね達成できたと考えられる。今後の改善点としては、Reading and Communication Analysis Homework の課題がある。実は、Know the Genre のウェブサイトにある異なるページを考えさせている。つまり、答えは Communication Analysis と同じなのである。取り組んだ結果、書き手も読み手も同じような人たちであると気づいてくれればよい。復習させることを重視した筆者はそうように考えた。しかし、実際に取り組む学生からは、「同じ答えでよいが不安になったが、同じ答えしか思い浮かばなかった」など、不要な混乱を招いた意見が出た。やはり、異なるサイトからの英文を使う必要がある。具体的な改善案として、切符の自動販売機の使い方や自動改札機の通り方を説明した英文を読ませることを提案する。対象となる読み手は同じと思われるが、書き手と書き手が配慮している点が大きく異なるはずである。そこに表れる新たな特徴や英語に気付かせれば、Remix/Rewrite で使える表現も増えるに違いない。次の機会には、是非この改善を加えたい。

4.4. Unit 4 Resorts および Unit 7 Education

山田 昌史

本節では、Unit 4 Resorts 及び Unit 7 Education について報告する。どちらのユニットも他のユニットと同様のユニット構成となっている。

Unit 4 では、静岡県が誇る有名な観光地のひとつで、世界遺産でもある富士山に関するリーディング課題と県内3カ所の観光スポット（大井川鐵道、熱海サンビーチ、日本平）についての紹介文を読解し、これらをモデルとして観光地の紹介文を作成する Remix 課題を課している。このことで、地域の観光資源を英語で読み解くと同時に、それを英語で紹介する効果的な英語表現を学習する。Unit 7 では浜松市のウェブサイトから日本の教育制度に関するリーディング課題とそれを元にして自身の小中学校の制度、生活について述べる英文を作成する Remix 課題を課している。このようにどちらのユニットも地域を話題とするリーディング課題を通して英語力を高めことに加えて、それぞれの英文がどのような英語表現によって構成されているか分析し、そこから英文の構成法や英語表現を学んだ後に、学んだ表現を元に自身で英文を構築し、作成した英文をピアレビューする協同学習を通じて学習項目の習熟度を図る。このことで本科目のシラバスの「授業の概要」に記された「タスク中心の課題探求型・課題解決型学習」を授業実践の場で円滑に行うことを可能にすることを狙いとしている。

これら2つのユニットが他のユニットとは異なり特長的な点が2つある。ひとつは、文法項目（比較の表現（Unit 4）と接続詞の種類と使い方（Unit 7））について他のユニットより丁寧に解説した点である。教養英語の場合、幅広い学部の学生が共通に用いるテキストであるため、大学入学時までの英語習熟度に大きな個人差があることが懸念される。このことから、文法項目について丁寧に解説することで、英語の習熟度の低い学生に対しては文法事項の学習と定着、英文法について習熟している学生にはこれらの項目の知識の確認と問題演習が行えるように工夫している。

もうひとつは、Sound Awareness / Prosody Awareness の2つの発音に関わる学習項目で実際の英語ネイティブの発音をもとに発音上のポイントを学習し、実際に発音練習できるように YouTube の動画の QR コードを掲載した点である。この動画は、チャンネル登録者数が200万人を超える Rachel's English¹ と呼ばれる YouTube チャンネル内の動画である。このチャンネルでは、難しい音声学の用語を極力使わず、英語の単音の発音からアクセントやイントネーションまで幅広く扱っていることに加えて、非ネイティブの英語学習者にも理解できる平易な語彙と聞き取りやすい速度の英語を用いて、英語の発音の仕方について練習を交えて解説している。また、1つの動画が3～5分と短いため、授業での活用がしやすい。加えて、本テキストには音声教材がついていないことから、少しでも英語ネイティブの発音を授業の中に導入しようという意図もある。

¹ <https://www.youtube.com/user/rachelsenglish> なお、チャンネル登録者数は2019年8月末のものである。

しかし、このような動画掲載には問題がいくつかある。まず、著作権上の問題である。今回のテキストにはQRコードのみを掲載して参考資料の扱いとすることでその問題点を最小としているが、今後、このような動画の著作に関わる動向によっては、掲載できなくなる恐れがある。また、これらの動画教材がYouTube上に掲載され続ける保証がなく、動画が削除された場合に授業で使用できない。これらの問題はあるものの、今後、ウェブ上に掲載されている多くの良質な英語学習教材をテキストなどに掲載し、これらを積極的に活用することで授業の幅が広がることが期待される。

本節で取り上げた2つのユニットについて、今後の課題を述べる。ひとつは、リーディング課題の英文の内容に関するものである。両ユニットで採用した英文（ウェブから取得）の内容は、学生（静岡県出身の学生がほとんどである本学の学生）にとって既知の情報を多く含む。このことで英文に含まれるいくつかの単語の意味が分かれば、容易にその内容が理解できてしまうことが予測され、学生の深い英文読解につながらないおそれがある。この問題はこのテキストを用いる教授者の授業方法によってある程度解消できると思われるが、本文の内容を精査し、学生にとって読みやすい内容でありながら学生が新たな知見を獲得できるよう工夫が必要であると思われる。

もうひとつは、英語力を高めながら学生の「教養」を合わせて育むことを目標とする「教養英語」の理念に、本節が取り上げた2つのユニットの内容が適うものであるかという点である。本テキストは本学の理念のひとつである「地域貢献」を踏まえて、英語学習を通じて地域理解に繋げることを大きな目標としているが、地域の学習から普遍的な「知」の修得に昇華することが肝要であるが、本ユニットの内容は、残念ながら学生の新たな「知」を拡げることには視点が無いと思われる。

「教養英語」とは、英語の力を高めるだけでなく、世界共通語としての役割を果たす英語の学びを通じて、グローバル社会を生き抜く上で必須となる広い教養に触れ、その学習から複雑化する社会において将来遭遇する新たな問題の解決に繋がる思考能力やコミュニケーションをする態度を身につけさせることが必要である。このことから本テキスト、特に本節で取り上げた2つのユニットの内容が「教養英語」が備えるべき内容を備えた教材であるかの検証が必要で、次期テキスト改定の際には、特に地域課題から普遍課題へとつながるテキスト内容となり、学生の知的好奇心を高める内容となることを期待する。

4.5. Unit 5 Literature

小池 理恵

4.5.1. 目的

教養教育は高校教育との接続を図るためにある程度その役割を果たしてきたと言える。その役割は「フレッシュマンセミナー」「人間力セミナー」「教養セミナー」など名称こそ異なるが、初年次教育の基礎力を補う授業に委ねられている。2012年に三大学（常葉学園大学・浜松大学・富士常葉大学）が統合された新生常葉大学でも「教養セミナー（一年次前期）」と「人間力セミナー（一年次後期）」を開講している。し

かしそれだけでは十分ではない。

教養の土台が十分ではないということはどういうことだろうか。例えば、私の担当する「アメリカ文化論 A」や「英語圏の文学 C」といった教職必修科目の授業で、文学の講義をする際に必ず学生たちに尋ねてみることもある。それは「日本でノーベル文学賞を受賞した作家は誰か、また作品を一つでも読んだことがあるか」ということだ。たった二人しかいない作家たちの名前を二人とも彼らの作品群とともに答えることができる学生はほとんどいない。

教養教育の一環として全学生に必修科目として履修させている「英語コミュニケーション」でその不足部分を補うことができるのではないかと考えた。本テキスト作成のための共同研究チームは、「英語コミュニケーション」における「ローカリティ（静岡性）」のあり方を幾つかのジャンルを挙げながら報告することを目的とした。新生常葉大学がグローバル（think globally, act locally）な立ち位置で、グローバル共通語としての英語をローカルな場で使いこなすことを目指して、担当したジャンルを静岡と結び教材を持ち寄ることとした。私が担当したのは「文学（Literature）」である。

4.5.2. 担当内容：文学と静岡、或いは静岡と文学

日本人として知っていた方が好ましい知識、さらには常葉大学が身を置く静岡県と深いかかわりのある知識を基本的な英語で発信できるようにというのが、本テキストの全体の狙いである。Unit 5 Literature では、静岡と関連している作家と作品から静岡を知り、最終的には静岡の文化を英語で発信することを目指す。

Pre-unit Research では、静岡県とかかわりのある人物と場所をリサーチさせる。人物としては中勘助（1885-1965）と井上靖（1907-1991）である。中勘助は静岡の服織で静養したことがあり、服織中学の校歌を作詞している。井上靖は伊豆で少年時代を過ごし、浜松と沼津で高校時代を過ごしている。初景滝（しょけいだる）・福田家は『伊豆の踊子』の舞台であり、富士山本宮浅間大社は「富士山一信仰の対象と芸術の源泉」であることから多くの芸術・文学作品にインスピレーションを与えたと言える。

Vocabulary Development では「文学」というジャンルを知るための語彙を学ぶ。

Know the Genre では、ノーベル賞の公式サイトから川端康成の略歴と代表作を紹介する。1968年にノーベル文学賞を受賞した川端康成（1899－1972）は静岡とかかわりのある作品『伊豆の踊子』（1950）を著している。

Reading and Communication Analysis では川端康成と同時期にノーベル文学賞候補となった三島由紀夫（1925-1970）を取り上げる。静岡には『豊穡の海』第4部「天人五衰」の主人公のゆかりの地がある。またペンネームの三島は静岡県三島市の三島である。

Prosody Awareness では富士山の歌を英訳した詞と百人一首から山部赤人（やまべのあきひと）の歌の英訳を載せている。

4.5.3. 授業実践と結果

2018 年度仮製本の段階で、教育学部初等教育の学生たちの「英語コミュニケーション」で実践した。2019 年度は初版で同じく教育学部初等教育の学生たちと外国語学部英米語学科の学生たちの授業で実施した。

2018 年度の授業実践の中で、Pre-unit Research は、伊豆の踊子と書かれた立札がある写真と浅間大社の写真のみ正解を検索することができた。他の写真は探す手がかりがわからないようだった。Vocabulary Development はそれぞれの日本語を和英辞典で調べている様子だった。「小説」と「詩」、カタカナである「メタファー」と「フィクション」はすぐに英語にすることができている様子だったが、それぞれの定義を質問すると、正確に答えられなかった。

川端康成がノーベル文学賞受賞者であることをヒントなしで答えられた学生は 2 名だった。その 2 人も作品名を挙げる際には若干不安そうだった。三島由紀夫の作品を一冊でも通読している学生は全くいなかった。それは、Reading and Communication Analysis のセクションに関する Question に回答することでわかった。

Question 1. Have you ever read any stories by Mishima?

Yes と答えた学生でもその先に発展的に会話を展開してみると、“tell me the title of the stories.” タイトルが出てこなかったり、更にはプロットが言えなかったりした。

4.5.4. 課題

授業実践が 2 年目に入ったばかりで具体的な課題を見つけることは難しい。入学年度によっても、高校での学びの状況と学生の傾向も異なるのが現状である。ただ本学に入学する学生はその大半が卒業後も静岡に残り就職する学生たちである。

英語の文章中に静岡県の地名が出てきたとしても、それがどこにあるのかわからないまま単語の意味だけを知ろうとするのではなく、実際の場所、物語の中の場面など総合的に理解できるようになるためには一般的な知識、教養は必要である。本テキストをきっかけに、静岡県の魅力を英語で発信しようとする学生が一人でも増えるよう授業実践を通して検討と分析を重ね改訂していく必要があると考える。

4.6. Unit 6 Industries

谷口 茂謙

このユニットでは、学生たちが地元の代表的な産業について理解するとともに、将来、自分が働く職場と扱う商品やサービスについて英語で簡単に説明することを想定した。そこで、学生たちの身近にありながらも静岡で作られていることをあまり知られていない商品について知ることと、誰もが知っている静岡の企業が社会に対して発信しているメッセージに触れて、将来、学生たちが自分の職場の魅力を英語で説明できるようになることを目的とした。そして、次の 4 点を具体的な到達目標とした。

- ・ 静岡県が医薬品や医療機器の生産額において全国 1 位を争っていることを知るとともに、産学官民を挙げて進めるファルマバレープロジェクトの概要を述べ

ることができる。

- ・日常生活で身近な商品を説明した英文を読んで、必ず含めるべき情報とそれを伝える英語表現の特徴を述べることができる。
- ・企業が社会に発信するメッセージを読んで、伝えるべき情報とそれを伝える英語の表現の特徴を述べることができる。
- ・学習した内容を活用して、自分が就いたと仮定した職場の魅力を英語で説明することができる。

Pre-unit Research では、ファルマバレープロジェクトについて、その概要を理解させることを重視した。そのため、英語で書かれたウェブサイトとともに、日本語のウェブサイトも紹介した。学生たちには、日本語のサイトで概要をつかみ、それが英語でどのように表現されているかを考えるよう指示した。加えて、このユニットで読む英文の予習として、その中で紹介される商品を製造した企業について調べさせた。やはり、日本語と英語のサイトを照らし合わせるよう指示した。Know the Genre では、商品の形状、特徴、使い方、使用上の注意点を説明した英文を取り上げた。そして、Communication Analysis で、この企業の他の商品について調べさせ、その上で、どのような人々が顧客であるか、つまり、英文の対象となる読み手について考えさせた。Reading and Communication Analysis Homework として、静岡を代表する企業が採用情報のページで発信しているメッセージを読ませた。そして、どのような情報を、どのような工夫をして伝えているかを考えさせた。Grammar Awareness では、企業が自社の魅力をアピールした簡潔な英文を与え、分詞構文が効果的に使われていることに気付かせた。そして、自分が希望する会社に就職できたと仮定して、その職場の魅力を伝える文章を、Remix/Rewrite の課題とした。将来の夢がはっきりしない学生も多いので、アルバイト先やサークル活動など、自分が所属する集団の魅力を述べてもよいこととした。もちろん、学習した分詞構文を使って表現するよう指示した。そして、最後にペアで伝え合った上で、相互評価をさせた。

提出された作文では、複数の分詞構文を使って魅力を伝えようとする学生たちの努力が十分に現れてきた。予め立てた4つの到達目標のうち、3つは概ね達成できたと考えられる。到達目標のうち、身近な商品を説明した英文に含まれる情報と表現の特徴については、十分に考えさせられていなかったことが、今後に向けた改善である。Communication Analysis の課題で、企業の他の商品について調べさせるのではなく、商品の説明に必要な情報と表現の特徴を理解させるべきであった。この企業については、Pre-unit Research で調べさせている。その時点で、静岡の企業が日常生活でよく使う商品を作っていることを十分に理解させ、英文の読解後は、英文について考えさせることに重点をおくべきである。具体的には、伝えねばならない不可欠な情報と、英文の特徴について考えさせる設問に差し替えたい。

本来なら、Know the Genre で取り上げた英文の特徴を使って、Remix/Rewrite を考えさせることが、このテキストの構成の点からはより理想に近い。しかし、この

ユニットで取り上げた英文は、商品の特徴を紹介するものであった。もちろん、さらなる工夫を加えることで、学生たちの身近な商品を説明させることもできるであろう。その一方で、筆者が考えた工夫は、Grammar Awareness で新たな簡潔な英文を与えることであった。Know the Genre で読ませた英文は、学生たちが発信するための見本としては、長すぎると判断したためである。様々なジャンルの英文を取り上げることと、学生に課す負担とのバランスを図ることは難しい。幸い、簡潔で適切な見本となる英文が見つかったこともあり、今回のような工夫に落ち着いた。これからも、理想と現実のバランスを考えながら、柔軟な対応で改善に臨みたい。

4.7. Unit 8 Your Future

このユニットの執筆者も、テキストの原型をまとめた 2016 年度をもって、事情により研究のメンバーから外れた。Unit 2 と同様に、それまでに作成された原型をできる限り活かそうと努力した。しかし、2018 年度の実践の反省を踏まえて研究会で検討した結果、執筆者の理解を得た上で課題を差し替えてテキストに加えた。そのため、2019 年の現時点では、Know the Genre から Homework Review までの一連の課題と Remix/Rewrite は、実際の授業でまだ使われていない段階である。

このユニットでは、1 年次に学ぶ最後の内容として、学生に将来の進路について考えるきっかけを与えるとともに、自分が将来やりたい仕事について英語で簡単に説明できるようになることを目的とした。そして、次の 3 点を具体的な到達目標とした。

- ・自分に思い浮かぶ仕事を基にグループで話し合わせ、自分が気づかなかった仕事の存在を理解した上で、仕事を選ぶ時に自分が重視する要素を具体的に述べることができる。
- ・英語で書かれた社会人の先輩からのメッセージを読み、自分の経験を語る際に必ず含めるべき情報とそれを伝える英語表現の特徴を述べるができる。
- ・学習した内容を活用して、自分が将来やりたい仕事について英語で説明することができる。

Pre-unit Research では、“Job” という言葉から思い浮かぶ仕事を書き出させ、それを基にグループで情報交換をさせた上で、卒業後にどんな仕事をしたいかについて考えさせた。多くの学生は日本語で話し合っていたが、中には自分の夢についてできる限り英語で伝えようと努力する学生も見られた。Know the Genre では、アメリカに留学をした後に日本企業に就職した社会人のメッセージを取り上げている。就職活動について述べた助言を英訳したものである。すべての学部 of 学生を考慮すると、留学に興味を持つ者は少ないが、留学に目を向けるきっかけとなることへの期待も込めた。対象となる読み手と、自分の経験を語る際に伝えるべき情報について考えさせている。Communication Analysis では、学生たちに進路を考える手がかりをつかませることを念頭に、書き手が職場を選んだ理由を理解させ、その上で、自分はどの要

素を重視するかについて考えさせている。Reading and Communication Analysis Homework の課題として、日本の大学を卒業して日本企業のロンドン支社で活躍する日本人が、自分の仕事の魅力を伝える英文を与えている。ここでも、学生たちに将来の仕事について考えさせることを重視して、書き手の仕事についてなど、内容を確認させた上で、書き手の仕事をやってみたいかどうかを考えさせる。Grammar Awareness で、仮定法過去が表す意味と基本的な構文を復習した上で、Remix/Rewrite で、自分が将来やりたい仕事についての説明を準備させる。そして、ペアで伝え合い相互評価をさせる。

この内容で授業をすれば、1 年次の終わりに、英語の学習を通して自分の将来について考えるきっかけを与えることには、十分に効果が期待できる。その一方で、Know the Genre、Communication Analysis、Homework Review の設問に改善が必要だと思われる。Know the Genre で、職場の選び方を説明するために伝えるべき情報を尋ねている。ここにはふさわしくない設問なので、これを削除する。次の Communication Analysis では、書き手が誰かを尋ねているが、やはり Know the Genre の設問と答えが重なり不適切である。これを例えば、“What does the author try to do telling you this message?” という設問にして、“He tries to give us some advice to choose a workplace.” のような答えを導くようにする。そして、“What kind of features do you find in the text?” という設問を加えれば、助言を与える表現の特徴について考えさせる流れができる。その上であれば、書き手が職場を選んだ理由を尋ねて、内容の理解を確認してもよいであろう。また、職場を選ぶ際に学生自身が何を最も重視するかを問う設問も、ここで与える必要はない。Homework Review で、書き手の会社で働きたいかどうかについて理由を述べる設問がある。そこで考えさせることができる。Homework の課題が、Know the Genre の英文と同じく学生たちに助言を与える英文なので、設問が内容の理解を問うものが多くなってよい。だが、会社の概要や時事の知識を尋ねる設問は、ここにはふさわしくないの削除する。書き手の仕事、その魅力、自分もやってみたいかどうかを考えさせれば十分である。このように、設問を整理する改善を加えたい。

5. 制作上の問題と改善策の提案

制作上の問題として浮かび上がった最も大きな事柄は、ウェブサイト上の記事を利用することの難しさである。この科目の目的に沿って、今回の研究においては、「実社会と関わりのある多種多様なオーセンティック（真正）な教材やメディアの活用」を重視してきた。ウェブサイト上の記事はその典型例である。授業では、取り上げた記事や関連するページに、スマートフォンやパソコンで学生たちに実際にアクセスさせることができた。現代の学生たちの学習意欲を高めることに大きな効果があった。その一方で、利用するための難しさが2つ明らかになった。

1 つは使用の許諾である。このテキストに掲載できた記事や写真で、許諾が必要となるものについては、すべて株式会社金星堂がその手間を引き受けて下さった。執筆

者たちが希望した記事や写真について、一つひとつ丁寧に許諾を得ていただいた。それだけでももちろん、十分にありがたいご協力である。しかし、許諾が得られなかったものや、著作権を持つ人・団体に連絡が取れない場合は、それ以上の交渉はしていただかなかった。それは当然のことであり、出版社の立場は十分に理解できる。そのため、どうしても掲載を諦めきれない記事については、筆者が直接に交渉に当たった。それに費やした労力と時間がやはり問題点である。

筆者が交渉した結果、許諾を得られた記事もあった。その一方で、どうしても許諾を得られないものも複数あった。それらについては、記事の内容を電子ファイルで筆者が保存し、授業の中でのみ資料として学生たちに提示することで了承をいただいた。筆者の場合は、学生の人数分の印刷物を配布して利用した。許諾が得られないものについては、テキストには掲載せず、資料として授業でのみ利用する。これがこの問題に対する現実的な対策である。また、テキストに記事が掲載できなくても、学生たちが授業中に各自でそれにアクセスできれば十分に活用できる。今回のテキストでも、教員が指定するサイトを見るよう指示して、課題を進めている箇所もある。

もう1つの問題は記事の差し替え、あるいは削除である。上に述べたように、許諾の得られない記事については、授業中に学生たちにアクセスさせて読ませることができる。だが、記事そのものがサイトから削除されることもある。印刷物に比べ、はるかに短い周期で変更されたり削除されたりすることが、サイト上の記事の特徴である。

具体例を挙げて考える。Unit 2 で取り上げたコンビニエンスストアの求人広告は、掲載の許諾を得られなかった。そこで、教員が URL を指示して授業中にアクセスさせている。最近ではコンビニの無人化が実験されており、近い将来にはコンビニの店員のアルバイトはなくなるかもしれない。しかし、それが社会に普及するまでにはまだかなりの年月がかかるであろう。また、求人広告の内容は、小さな変更はいろいろとあろうが、掲載される情報やそれを伝える表現の特徴が全く変わってしまうことは考えにくい。その意味では、現行の記事が削除されても、差し替えられたページにアクセスができれば学生にとって興味深い教材として活用できる。

Unit 6 で取り上げた企業の社長のメッセージも、出版社との交渉では許諾を得られなかった。その理由は、交渉の時点でウェブサイトから削除されていたからである。テキストの原型を制作した 2016 年の時点ではサイト上に存在したが、2018 年に交渉をお願いした時点では、すでに削除されていた。筆者から直接にお願いして、幸いにも許諾を得られたので掲載できた。だが、ここに削除の問題点が浮かび上がる。ひとたび掲載されたものが削除されてしまい、授業中に学生がアクセスできなくなると、学生たちはおそらく「教材が古い」という印象を持つであろう。社長のメッセージは大変に良い教材になると筆者は判断したが、学ぶ学生の立場からは、その価値の感じ方が異なるはずである。学習意欲を減退させる恐れも考えられる。

テキストに掲載できなくても差し替えられた記事が活用できる例と、テキストに掲載できても削除されてなくなってしまう例がある。差し替えられても活用できる例には対応できるが、テキストに掲載できた記事が削除される例への対策は難しい。出版

社からは、元の記事を参考にして新たな英文を書き下ろすよう助言を受けた。確かに、そうすれば、記事の使用の許諾を得る必要もなく、教材が古いという印象を学生に与えることもない。それは一つの改善案だが、担当教員の負担が大きく、時間もかかることと思われる。また、オーセンティックな教材とは言えないものになる。

より現実的な改善策としては、一つの記事だけではなく、複数の候補の記事を探しておき、一つが削除されたら、また新たな記事を探して候補に加えるという執筆者側の日常の研究における準備である。ただ、これも実際にはかなり困難だと思われる。例えば、Unit 6 のメッセージと同じような記事を見つけることはやはり難しい。静岡の企業からとなとなおさらである。実際には記事そのもので地元をこだわらずに範囲を広げて探し、別の形で地元と結びつける工夫も必要になると考えられる。

6. 研究のまとめと今後の課題

今回の研究では、常葉ブランドの英語教育の構築を目指して、英語コミュニケーション I および II のテキストの制作に取り組んだ。研究チームの教員が力を合わせて熱心に研究を進め、様々な困難を乗り越えて『常葉大学英語コミュニケーション I&II』の出版を成し遂げることができた。英語コミュニケーションに要求される目的と具体的な到達目標の達成を期待することのできるテキストが出来上がったと、執筆者一同は自負している。常葉ブランドの完成にはさらなる年月を要するはずだが、その第一歩として、その成果を具体的な形にできたことの意義は大きい。

その一方で、今回のテキストにはまだ音声の資料が不足している。Sound Awareness や Prosody Awareness で、ウェブサイト上の音声を教材としている部分はあるが、出版社からは、すべてのユニットに音声の資料を付けるよう助言を受けている。もちろん、先に述べたようにサイト上の記事への対応も継続して考えなければならない。

教育の質保証を実現し、常葉ブランドの英語教育の構築を目指すという理想を達成するには、大学全体で統一のテキストとして導入できるものに改善を重ねる必要がある。例えば、新しいテキストの導入の 1 年後に、次の改訂に向けた新たな共同研究をスタートさせ、担当教員に対して改善に向けたアンケートを行い、意見を集約する。その後、2 年をかけて教材の改善や新たな教材を制作して改訂版の出版につなげる。このように継続的な改訂を加える体制を作ることができれば、4 年ごとに改善されたテキストが制作され、大学全体で導入できるようになる可能性がある。それが実現できれば、常葉ブランドの英語教育も構築されるはずである。

謝辞

この研究の成果として『常葉大学英語コミュニケーション I&II』を出版することができました。出版に当たり、株式会社金星堂の皆様には多大なご協力を賜りました。また、記事や写真のご提供をはじめ、様々なご協力を賜りました多くの企業・団体の皆様に厚く御礼申し上げます。そして、この研究が常葉大学の支援による共同研究であることを改めて記し、感謝の意を表します。皆様、誠にありがとうございました。

付録

ピーター・ハーディケンによる報告の原文

4.1. Unit 1 Clubs & Circles

Peter Hourdequin

The pedagogical concept for Unit One — consistent with that of this textbook as a whole — is to use a genre-based approach to help students learn to communicate about their everyday lives through a series of activities and assignments.

Unit One's topic is "Clubs and Circles." This topic was chosen because it is likely to be highly relevant to the social practices that first year university students in the class are engaging in at the time of study — namely, exploring the clubs and activities offered by Tokoha University.

The unit's first task is a simple web-quest which asks students to research clubs and circles that they can join here. They are asked to input Japanese and English names for the clubs and circles. This activity is designed to activate students' background knowledge and schema about the chapter's topic.

The second task in the unit focuses on vocabulary development. Students complete a word search for the names of clubs and activities in English. They are provided with a Japanese list of clubs and circles on offer at Tokoha University.

The next task is "Know the Genre." Four questions are listed for students to think about as they read and begin to analyze a sample text introducing a university's clubs and activities in English. Students are asked to speculate on where the text comes from, who was involved in constructing it, and to note the types of information that is conveyed. Finally, students are tasked with identifying and listing words and phrases that are new to them. These questions scaffold media literacy and are done as part of the book's genre-based approach. Students will later produce a similar text, so it is important for them to be mindful about the way words and phrases are used in this genre.

The next task falls under the category of "Communication Analysis." Students are asked to look back at the text about three different university clubs and extract information in five different categories: Description, Main Activities, Meeting Times / Days, Meeting Place, and How to Get More Information.

The first half of this unit concludes with a homework assignment: students are asked to read and analyze a dialogue that again presents information about a university club, but this time in conversational form. It is hoped that students will notice the difference between written and spoken forms of communicating similar information so they can apply this knowledge to their own writing and

speaking skills.

The second half of the unit begins with a prosody awareness task in which students identify contracted forms of various words used in the dialogue they examined for homework. They learn how the sound of each expression is changed.

This is followed by a grammar awareness task in which students notice the use of the imperative mood in the club introduction web-page text that was introduced earlier in Unit One. They collect expressions that imply imperative intention, and learn what words and phrases are used to soften the imperative mood.

The final task in the unit is a group activity in which students apply what they have learned: they are asked to share information they gathered previously in order to introduce a club or circle at Tokoha University. The instructions for this task guide students to look carefully at examples from the genre they are working in, and to collect useful phrases that they can use for their own “remix” of a club or circle introduction paragraph.

参考ウェブサイト

Unit 3 Hometown

“How to travel between the Fuji Five Lakes and Tokyo”

Adapted from <<https://www.japan-guide.com/e/e6905.html>>

ジャパンガイド株式会社

“Gotemba Premium Outlets”

Adapted from <<http://www.japan-guide.com/e/e5213.html>>

ジャパンガイド株式会社

Unit 4 Resorts

“Mount Fuji”

Adapted from <<https://www.japan-guide.com/e/e2172.html>>

ジャパンガイド株式会社

“Atami Sun Beach”

Adapted from <<https://japan-highlightstravel.com/en/travel/atami/040003/>>

東海旅客鉄道株式会社

“Oigawa Railway”

Adapted from <<http://oigawa-railway.co.jp/en/sl.html>>

<<http://oigawa-railway.co.jp/en/thomas.html>>

<<http://oigawa-railway.co.jp/en/local.html>>

大井川鐵道株式会社

“Nihondaira Ropeway”

From <<https://japan-highlightstravel.com/en/travel/shizuoka/070006/>>

東海旅客鉄道株式会社

Unit 5 Literature

“Yasunari Kawabata Biographical”

Adapted from <https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1968/kawabata-bio.html>

©The Nobel Foundation 1968

“Mount Fuji”

英訳: Caroline E. Kano (東京外国語大学元特任教授) 旺文社オーレックス英和辞典・和英辞典サイト「続・日本の歌」

<<http://olex.sakura.ne.jp/blog/2011/01/24/240/>>

株式会社旺文社

“Yamabe no Akahito”

From <<http://jti.lib.virginia.edu/japanese/hyakunin/macaulay.html>>

University of Virginia Library

Unit 6 Industries

“Gel Care Cold”

Adapted from <<http://www.trycompany.co.jp/en/gelcare.html>>

株式会社トライ・カンパニー

“Yamaha Seeks People Willing to Take on Challenges and Find Them Enjoyable”

From <https://www.yamaha.com/en/recruitment/new_graduates/top_message>

ヤマハ株式会社

“A Most Rewarding Endeavor”

From <http://www.tamiya.com/english/tamiya/tamiya_01.htm>

株式会社タミヤ

Unit 7 Education

“Japan Education System”

Adapted from <https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamaeng/06education/06_1.html>

浜松市

“Life at Hamamatsu City Schools”

Adapted from <https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/hamaeng/06education/06_4.html>

浜松市

